慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦争と音楽 : 明治維新から"大東亜戦争〝まで
Sub Title	War and music : from the Meiji Restoration to the Asia-Pacific War
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2011
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.5 (2011. 5) ,p.1- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20110528-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦争と音楽——明治維新から〝大東亜戦争〟まで

池井　優

はしがき——音楽が戦争に果たす役割
一　日清戦争以前
二　日清戦争と音楽
三　日露戦争前後
四　第一次世界大戦前後
五　満州事変の勃発と音楽
六　日中戦争と軍歌、軍事歌謡全盛時代の到来
七　〝大東亜戦争〟の時代
八　戦後の問題
結び

はしがき——音楽が戦争に果たす役割

戦争の遂行に必要なのは、軍隊、武器、弾薬、作戦、資金だけではない。兵士の士気を高める勇壮な軍楽隊の

演奏、軍歌の高唱、国民の戦争への支持と協力を促進する軍歌、国民歌謡、時局歌謡、前線の兵士の慰問と占領地のひとびとへの宣撫工作の手段としての歌手と楽団の派遣、戦死した兵士を悼む鎮魂歌の発表、さらに戦意を低下させる恐れのある軟弱音楽の排除、そして戦争相手国から導入された〝敵性音楽〟の追放である。一方、庶民は陰で反戦歌を作り、あるいは既存の流行歌、童謡などの歌詞を変えて政府、軍部に対し暗黙に批判、抵抗を行なう。戦争の手段としての音楽にはさまざまな側面がある。

軍楽隊の演奏は、軍内部とともに陸軍記念日、海軍記念日などの折、観兵式、観艦式において一般大衆に軍の威容を誇示し、国民の意識を高めるためにも活用された。軍歌は、発表会、演奏会そして一九三〇年代から急速に普及したラジオで繰り返し流されることによって大衆に受け入れられ、とくに大衆に好まれるものは有名歌手のレコードによってさらに広まる。軍歌ではないが、戦争を陰で支える力を養う国民歌謡は全国紙といわれる大発行部数を誇り、全国的に影響を持つ大新聞社、大衆向けの多数の雑誌を刊行している出版社が作詞、作曲を募集し、当選作には多額の賞金が与えられ、レコード化されて世に出る。さらに見逃せないのが、映画とのタイアップである。戦争を主題とした映画は、前線での兵士の戦い振り、時には軍馬の活躍までとりあげると同時に、前線を支える銃後のひとびとの献身的努力を描き、多くの場合、主題歌が添えられる。なかには軍歌、国民歌謡がヒットするとそれをテーマとする映画が作られる。そして、歌手は楽団とともに国内は勿論、中国、南方など前線の兵士の慰問と現地のひとびとに日本に親しんでもらう宣撫のために派遣されることが多かった。

では、明治維新から〝大東亜戦争〟まで、日本の戦争と音楽がどのようにかかわってきたか追ってみることにしよう。(1)

一　日清戦争以前

ペリー来航時、上陸に際して披露されたアメリカ軍楽隊の演奏は応接に当たった幕府の役人をはじめ西洋音楽に接したことのない日本側を驚かせたが、日本人が最初に輸入した洋楽は、洋式軍隊を訓練する一部としての鼓笛楽であった。明治維新の頃には、大きな藩はほとんどみな鼓笛楽を訓練に用いていた。俗に「維新マーチ」と呼ばれる鼓笛の曲は、鹿児島藩で「英式」と呼んでいたもので、〝ヤンキー・ドゥードル〟に類似している。日本の開国、さらに横浜、神戸などの開港、開市に伴って多くの外国人が来日し、諸外国の公使館、領事館のある居留地で外国人が音楽を演奏したり、楽しんだりしたが、日本の洋楽はこのルートではなく、軍楽として導入されたのであった。(2)

明治時代の最初の軍歌ともみなされる「トンヤレ節」は一八六八年二月薩摩・長州・土佐ら二十二藩の兵が江戸を目指して進軍した時に歌われた。「トンヤレ節」は長州出身の参謀品川弥二郎が、変名で一軍の士気を鼓舞するため作った進軍歌で作曲は同じ長州藩の大村益次郎であった。この「宮さん、宮さんお馬の前にひらひらするのはなんじゃいな、トコトンヤレトンヤレナ、あれは朝敵征伐せよとの錦の御旗じゃ知らないか、トコトンヤレトンヤレナ」で有名になった進軍歌は五月の上野の戦争後、歌詞を加えて流行し、戦火が収まってからも広く歌われ、明治の流行歌第一号となった。

やがて陸軍と海軍に軍楽隊が生まれることになる。一八七一年五月、兵部省は旧薩摩藩の軍楽隊員を中心に、各藩から英式鼓手を集めて軍楽隊を創設した。八月には浜離宮で明治天皇の御前で観兵式を行い、「英式楽隊上覧」が行われた。同年九月兵部省は海軍軍楽隊を独立させた。海軍軍楽隊創設と同じ頃陸軍はフランス式訓練採用のためイギリス式軍楽を廃止する。そこで一部の者は海軍軍楽隊に入り、他は陸軍に残ってフランス式を学び

ながらイギリス式も復習していたという。陸軍ラッパ教官として招かれたフランス人ダクロンは、ラッパのみならず軍楽一般の心得もあったので、その指導を受けた隊員はめきめき上達し、翌年一月鎌倉で天覧の軍事演習の折り明治天皇の前で演奏し、この時点で陸軍軍楽隊は完成したといわれる。注目すべきは、軍楽隊員は、幼い頃から音楽に慣れ親しんだ都会人でなく、主として地方の武士の家に育った青少年であったことである。彼らは江戸的な音曲も遊芸も知らない。幼時から幕末の風雲にもまれ、尊王攘夷の思想の洗礼を受け、軍事の一部門としての軍楽を実践したのであった。(3)

庶民の間に音楽が広まったのは、明治新政府の小学校の教科に「唱歌」をとりいれたことが大きい。一八七一年文部省が創設され、師範教育研究のため伊沢修二がアメリカに送られた。伊沢は教育全般の調査勉学のかたわらメーソンに音楽を学んだ。日本に唱歌教育の行われていないことを痛感し、帰国後文部省直轄の音楽取調掛の設置とともに伊沢は御用掛となり、まもなく掛長となって、アメリカより招いたメーソンらの協力によって「小学唱歌初編」を編集、刊行した。「蝶蝶」、「蛍」（のちに「蛍の光」と改題）など三十三曲を収録し、八三年には「第二編」、八四年に「第三編」が相次いで出され、さらに「中等唱歌集」が発行され、「故郷の空」、「敵は幾万」、「埴生の宿」などが収められ、小学生、中学生のみならず、誰もが歌に親しむ機会が生まれることになった。(4)

二　日清戦争と音楽

近代日本が経験した最初の対外戦争は大国清国との戦いであった。

唱歌教育の普及と洋楽の大衆化によって、この戦争の遂行に当たって音楽は大きな役割を果たすことになった。都会では市中音楽隊も民衆の間に入り、大きな役割を担った。すでに開戦前の一八九一年『音楽雑誌』に発表さ

れた「凱旋」（「道は六百八十里」）、同じ年に発行された『国民歌集』に収められた「敵は幾万」も盛んに歌われ、「元寇」も軍楽隊から全国軍人に普及し、小学校の唱歌の教材になって急速に広まった。戦争に先だって在ドイツ公使館付武官福島安正が四百四十日を費やして単騎シベリアを横断した快挙は、国民に熱狂的に迎えられ、それは「騎馬遠征歌」となって流行し、福島の旅情を詠んだ落合直文の「波蘭懐古」も広く愛唱された。

このようにして軍歌とそれに類似するものは、戦前にも歌われていたが、戦争開始とともに、多くの曲が作られ世間に広まっていった。日清戦争中に作られた最初の歌は「婦人従軍歌」であった。新橋駅で見た赤十字社看護婦の出征していく姿に感動して近衛師団軍楽隊のひとりが作詞した「火筒の響き遠ざかる、後には虫も声立てず……」で始まるこの歌は兵隊のみならず従軍看護婦に対する関心の高さを示し、この歌の流行に伴って看護婦志望の女性が増えたといわれる。戦局が進むにつれて、新聞にはさまざまな軍国美談が載った。そのひとつが、黄海の海戦における一水兵の物語であった。戦闘中ある水兵が体に十数か所の傷を負い、また顔も火傷で気息奄々のなか、通りかかった副艦長に「定遠はまだ沈みませんか」と問いかけ、副艦長の「心配するな、定遠はもはや砲撃のできないまでにやっつけた。これから鎮遠をやるのだ」と答えると「どうか仇を討ってください」と言って絶命したというのである。当時清国の誇る戦艦、定遠、鎮遠との死闘と死ぬ間際まで戦意を失わなかった三等水兵の物語は、これにヒントを得て詩人佐々木信綱が作詞した「勇敢なる水兵」となり、日本兵の国家に対する忠節が高らかに歌い上げられ、陸軍の一ラッパ手が進軍ラッパを吹きならす最中敵弾が喉を貫いたが、死んでもラッパを離さなかった木口小平のストーリーをモデルとした「喇叭の響き」とともに、広く歌われ、無名兵士の英雄化によって、日清戦争を「国民の戦争」にしたのであった。(5)

明治天皇ご自身も歌人で軍歌好き、日清戦争が開始されての成歓の陸戦、黄海の海戦について詩を作られ、陸海の軍楽隊に示され、「黄海の大捷」には海軍軍楽長田中穂積が曲を付け天皇は大変気に入られた。陸軍につい

てはお気に召すものがなく、天皇が好まれた軍歌「喇叭の響き」の曲をあてがって御製軍歌「成歓役」を完成させた。一八九四年九月下旬広島大本営でのことであったといわれる。(6)

一方、前線に赴いた体験をもとに作られヒットしたのが「雪の進軍」であった。大山巌率いる第二軍司令部付の軍楽隊の軍楽次長として山東半島の寒村に二週間駐営した経験を紹介したもので、「雪の進軍氷をふんでどれが河やら道さえ知れず、馬は斃れる捨ててもおけず、ここは何処ぞ皆敵の国、ままよ大胆一服やれば頼みすくなや煙草が二本」といった親しめる口語体と相まって現地の将兵にも歓迎された。しかし四番の最後の文句「どうせ生かしちゃ還さぬつもり」は当時では問題にされなかったが、昭和になると軍からクレームがついて「どうせ生きて還らぬつもり」に改めさせられた。(7)

戦争当初、日本文化の源である大清帝国と戦うことに異常な緊張を覚えた日本人であったが、やがて日本の勝利が確実になると圧倒的な熱狂が日本国中に広まっていった。田山花袋は『東京三十年』の中で次のように回想している。

> その年の秋、私は一簑笠、一草鞋で、浜街道を水戸から仙台の方へと行った。どんな田舎でもどんな山の中でも、戦捷の日章旗の風に靡いていないところはないのを私は見た。人々は戦捷の祝だといって飲み、出発の別離だと言っては集まって騒いだ。（中略）維新の変遷、階級の打破、士族の零落、どうにもこうにも出来ないような沈滞した空気が長くつづいて、そこから涌き出したような漲りあがった日清の役の排外的気分は見事であった。戦争罪悪論などはまだその萌芽をも示さなかった。

その一方、田山花袋は文学者らしく戦争の熱狂の裏にある軍歌の響きについても、記している。

軍歌の声が遠くできこえる……。

それは悲壮な声だ。人の腸を断たずには置かないような、または悲しく死に面して進んで行く人のために挽歌をうたっているような声だ。(8)

日清戦争の勝利は、日本人の清国に対する劣等感を優越感に変えた。清国、清国人を嘲笑、罵倒する〝ちゃんちゃん〟、〝ちゃんちゃん坊主〟がでてくる「めちゃめちゃ節」の大流行にその例を見ることができる。「日本の意気地は余ッ程強いもの、朝鮮国を助けるチウテ。ちゃんちゃんをメッチャメチャ……」(9)。

こうして、日清戦争は音楽との関係を深める大きな機会となった。

三　日露戦争前後

日清戦争からちょうど十年、日本は朝鮮半島、南満州のヘゲモニーをめぐってロシアと戦火を交えることになった。日清戦争の事績をあつかった軍歌が広く歌われるようになったのは日清戦後で、それが日露戦争まで引き続いて軍歌の全盛期が来る。勝利への歓喜の思い出とともに、遼東半島の返還を余儀なくされた三国干渉の主役であったロシアへの敵愾心の発露でもあった。市中音楽隊、すなわち楽隊屋が数を増し園遊会、運動会、祝賀会、開業式などに登場し、さらに商店の売り出しなどに活用されるようになった。その際演奏された曲目の多くを占めたのは、すでに庶民におなじみとなった軍歌であった。

当時は統一した教科書はまだない時代で、唱歌の教材は各学校の教員が選択することになっていたから、唱歌本は印刷術の進歩と出版社の競争によって数多く出され、「箱根の山は天下の嶮……」の「箱根八里」、「荒城の

月」などの名曲が入り、また民間が出した唱歌集のなかから「鳩ぽっぽ」、童話に題材をとった「桃太郎」、「金太郎」、「浦島太郎」など老人から子供まで誰でも歌えるやさしい歌詞とメロディで後世に残る傑作が生まれ、さらに「鉄道唱歌」、「夏は来ぬ」なども日露戦争に先だって広まっていった。もうひとつ注目すべきは、第一高等学校の寄宿寮で作られた寮歌から「春爛漫の花の色」、「ああ玉杯に花受けて」などの名曲が生まれ、全国の学生によって愛唱され、世間にも広まっていったことだった。したがって、明治三十年代に発表された軍歌は日露戦争中のものを含めて唱歌的なものが多く、かってのような剛健な味のものが減った。唯一の例外は、「軍艦行進曲」である。この曲は「守るも攻めるも……」の歌詞に横須賀海軍軍楽隊の瀬戸口藤吉がまず軍歌としてメロディを作り、それから時間をかけて吹奏楽用の行進曲に仕上げていった。その後日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を撃滅する快挙によって日本海軍の名声があがるとともに、日本を代表するマーチとしてあらゆる機会に演奏され、国民の間に定着していく。戦争開始直前に発表された「日本陸軍」は「天に代わりて不義を討つ……」にはじまり、出陣、斥候、工兵、砲兵、歩兵、騎兵、輜重兵、衛生兵、凱旋、平和と陸軍の活動を網羅するものであった。当時は軍隊以外ではあまり歌われなかったが、日中戦争時に出征兵士を送る際、日の丸の小旗を振って歌われるようになり全国民に知られることになった。

戦争が開始されると「征露軍歌」、「露西亜討伐の歌」、「露国征討の歌」などがつぎつぎ売り出されたが、号外の文句を大急ぎで七五調に直した歌詞に有り合わせの古い曲をくっつけたような安易なものが多かった。そうしたなかで、民間から生まれた傑作が「戦友」であった。京都師範付属小学校教諭で明星派詩人であった真下飛泉が義兄の従軍土産話にヒントを得て学芸会用に作ったもので、全部で十二編、一人の兵士が出征し、負傷し、帰郷して村長に選ばれるまでの物語で、「ここはお国を何百里……」にはじまり、戦場における兵士の心情が生き生きと描かれているところから共感を与え、しかも哀調を帯びた歌いやすいメロディとあいまって、全国に普及

していった。しかし厭戦的内容が含まれていたため、軍隊内部では歌うことは禁止され、昭和に入ってから公けに歌うことはままならず、戦後になって森繁久弥、アイ・ジョージなどによりリバイバルすることになる。[10] 英雄を称える叙事詩として「広瀬中佐」、「橘中佐」が作られ、特に「とどろくつつ音飛び来る弾丸……」ではじまる「広瀬中佐」は部下杉野兵曹長を最後まで探す「杉野はいづこ、杉野は居ずや」の叫びとあいまって国民的英雄軍神広瀬武夫を生み出し、また乃木将軍とロシアのステッセル将軍が停戦に合意した「水師営の会見」が「庭にひともとなつめの木……」など優れた情景描写により、戦後になって大いに歌われた。

戦争一色と思われた当時にも、反戦歌が存在した。作者不詳の「かあちゃんごらんよ」である。一高寮歌「春爛漫」のメロディで歌われたという。母親が父の戦死をこどもに語って聞かせるが、こどもは納得せず「母ちゃんごらんよ向こうから、サーベル下げて帽子きて、父ちゃんによく似たおじさんが、たくさんたくさん歩いてる、もしやぼくの父ちゃんが、帰って来たのじゃあるまいか」というもので一時パッと流行したという。[11]

なお日露戦争時には社会主義の運動が芽生えていた。一九〇三年十月、幸徳秋水、堺利彦らが東京に平民社を設立し、やがて週刊『平民新聞』を発行して反戦と社会主義運動を展開した。はじめ反戦、非戦を主張していた黒岩涙香の『萬朝報』は「ロシア討つべし」の世論が盛り上がると「新聞は平時においてはあくまでも反政府的であらねばならぬ、戦時においてはあくまで好戦的であらねばならぬ」主戦論に転向、これに抗議して退社した幸徳秋水が出したものであった。一九〇四年十二月四日の『平民新聞』に発表された「富の鎖り」は「日本陸軍」のメロディを借りて歌われた。[12]

日露戦争は、戦争と音楽においてもさまざまな問題を投げかけたのである。

四　第一次世界大戦前後

一九一四年、ヨーロッパで勃発した世界大戦は、日本にとっては元老井上馨の言葉を借りるとまさに「国運の発展に対する大正新時代の天佑」であった。ヨーロッパ列強が欧州戦線に力を集中してアジアを顧みる余裕がないのにつけこんで、一挙に日本の立場を固めようとしたのである。それは、日英同盟に基づいてイギリスの敵ドイツに参戦し、さらに中国との懸案を一挙に解決しようとする動きとなって現れた。

まず、イギリスのドイツ艦艇の撃滅への協力要請に応じ、東アジアにおけるドイツ勢力の一掃を目指し、在中国ドイツ権益獲得のため青島攻略作戦を実行に移し、赤道以北のドイツ領南洋諸島を占領した。そうした動きに呼応して演歌師が取り上げたのが「青島節」である。「青島よいとこ誰がいうた、うしろはげ山、前は海、尾のない狐が住むそうな、ぼくも二三度だまされた　ナッチョラン」。青島は占領後日本の守備隊が駐留し、尾のない狐は売春婦を指す。(13)

大戦中、中国に関しては悪名高き二十一カ条要求を突き付け、中国民衆の反感を買ったのみならず、欧米列強からも疑惑の目で見られるに至ったことはよく知られているが、日本は戦勝国の一員としてヴェルサイユで行われた講和会議に参加し、山東半島の利権、旧ドイツ領の南洋諸島を国際連盟からの委任統治のもと事実上の支配下に置くなどいくつかの成果を得た。またロシアで勃発した革命に対し、シベリアに出兵したが、革命を阻止するには至らなかった。

こうした状況は、音楽とは繋がらなかった。敵愾心の高揚がみられず、したがってめぼしい軍歌はひとつも生まれず、それどころか戦争成金気分が巷にみなぎり、享楽的な歌謡ばかりが街頭に流れた。

一九二〇年代は戦争のない時代であり、むしろ一九二一年から二二年にかけてワシントンで行われた海軍軍縮

会議とその結果結ばれた主力艦に関する軍縮条約は「軍歌不毛の時代」を生みだすに至る。軍縮の影響は思わぬところにも影響を与えた。陸軍は一九二二年三月に第三師団、翌年近衛師団と第四師団の各軍楽隊を廃止した。「大陸軍の中の僅かな軍楽隊を廃止したところで大した削減にはならない」とかなりの反対意見があったものの断行され二度と復活することはなかった。一方海軍は、舞鶴鎮守府が要港部に格下げになり、編成上軍楽隊は配置されないことから横須賀海兵団に引き揚げた。これはあくまで編成上の措置であったところから、一九三九年再び鎮守府に昇格した際、舞鶴海兵団として復活している。第四師団軍楽隊は、廃止を惜しむ市民の声を反映して大阪市音楽隊として存続されることになった。(14)

こうして陸軍軍楽隊は、ワシントン条約以後一九四五年の終戦時まで戸山学校音楽隊一隊のみとなった。第二次大戦中、中国や東南アジアに派遣された陸軍軍楽隊は、形の上ではすべて戸山学校軍楽隊から分派されたものである。

ただ、一九二〇年代に特筆すべきことは、一九二五年の七月のラジオ放送の開始、さらにレコード企業の躍進によって大衆が音楽に接する機会が飛躍的に増えたことであった。それが、満州事変にはじまる軍国主義の高まりとあいまって戦争と音楽の関係に新しい時代が到来する。

五　満州事変の勃発と音楽

一九二九年十月のニューヨーク株式の大暴落に端を発した世界恐慌は、日本を直撃し、特に農村の疲弊、都会における失業者の増加は、日本全体に暗い影を投げかけていた。こうした風潮を代表したのが高橋掬太郎作詞、古賀政男作曲の「酒は涙か溜息か」であった。都々逸のような歌詞をギターの性能で活かし、藤山一郎が歌った

この曲は、一九三一年九月に発売されたが、年末までに百万枚を突破する大ヒットとなった。

この歌が世に出た九月の十八日に発生した柳条湖事件をきっかけに満州事変が勃発した。関東軍の謀略による事変であったが、閉塞感に捉われていた一般国民にとって不況脱出の好機と歓迎されたことも事実であった。こうした大衆の動きに応えようとしたのがマスメディアであった。当時のマスメディアは、ラジオの出現、関東大震災と世界恐慌の影響を受けて破たんした小資本の新聞に代わって大阪朝日、東京朝日の朝日新聞、大阪毎日、東京日日の毎日新聞が全国紙として登場し、新聞は一部のインテリを対象とするオピニオン・ジャーナリズムから家庭の主婦を含む大衆を意識したマス・ペーパーの時代に移った。四コマの連載マンガ、新聞大衆小説の定着、その日の番組を新聞の紙面で紹介するラジオとのタイアップ、マラソン、体操、野球、展覧会、音楽会など新聞社によるイベントの創出へと編集方針が移っていった。さらに『少年倶楽部』、『キング』、『講談倶楽部』に代表される講談社発行の九大雑誌、農村を中心に直売方式をとって発行部数を伸ばした『家の光』などマス・マガジンも影響力を持つ時代となった。(15)

マスメディアにとって戦争は、ラジオは聴取率、新聞、雑誌は発行部数をあげる絶好の機会となる。ひとびとの関心が満州事変に集中すると、軍人の作詞、軍楽隊の作曲の軍歌から民間が追随する形となって優秀なものがつぎつぎ作られていく。「満州行進曲」は、朝日新聞社が「皇軍慰問のため」作ったもので一九三二年一月四日の朝日新聞紙上に発表され、二月十五日ビクターからレコードとなって発売された。「満州行進曲」はレコードによって普及することを最初から意図して作成されたのであった。「過ぎし日露の戦ひの、勇士の骨をうづめたる、忠霊塔を仰ぎみよ……」の描写は朝日の記者が計画部長として奉天に駐在し、戦闘の実況と将兵の生活を目撃した結果を描写して詞にまとめ、堀内敬三が日本的陽音階を用いて曲をつけた。当時朝日、毎日に次ぐ一般紙であった報知新聞も軍歌の普及に努めた。報知の呼びかけで誕生したのが、巌谷小波作詞、陸軍戸山学校軍楽隊

作曲の「ああ我が満州」であった。歌詞に満州聖戦の観念を述べ、感情に訴える描写がなかったためレコードの力である程度普及したが、親しみにくいと不評であった。

ラジオも満州事変勃発以来、速報性を活用したニュース、軍隊の出発、戦死者の慰霊祭、飛行機献納式などの実況、時事解説など大いに電波メディアとしての力を発揮したが、ラジオならではの企画が「在満同胞慰安の夕」と日満交換放送の実現であった。「万里の異疆に戦塵に塗れ乍らも、激務の余暇を割いて期待と喜悦に打ち震えながら家郷にある同胞と共に同じマイクより流れ出づる懐かしのメロディに耳傾ける安らけき心の裡にこそ凛然として立つ皇軍の武勇が湧き出る」歌謡曲、講談、浪曲、琵琶、落語などの慰安・娯楽番組が東京劇場から中継されたのは、第一回が事変勃発から一カ月半後の十月三十日で以後翌年一月二十四日まで計十回行われた。

一九三二年二月、戦火は上海に飛び火した。この戦闘で爆薬筒を抱えて中国側の鉄条網に突っ込んだ決死隊員三人が爆破とともに肉弾となって飛び散り突破口を開いた。三人の行為は「爆弾三勇士」、「肉弾三勇士」としてまさに軍国美談の典型となった。映画界がこの絶好のテーマに飛びつき、「忠烈！　肉弾三勇士」、「忠魂・肉弾三勇士」、「忠烈・爆弾三勇士」などと銘打ってなんと九社が映画化に踏み切った。ある社は現地ロケを敢行、ある社の作品は犠牲になった三人の兵士の生家をとりいれ、ある社は新人を抜擢して兵士の役にあたらせ、名誉ある役に選ばれ感激した三人は出演料を陸軍省に献納するなど話題も多く、封切られた映画はそれぞれ好評であった。「肉弾三勇士」は映画以外に、歌舞伎、新派、新国劇、浪曲さらには人形浄瑠璃にまで取り上げられるにいたった。(16)

当然、軍歌としても絶好の題材であった。十数編が作られたが、残ったのは次の三篇であった。①朝日新聞社募集入選歌「肉弾三勇士の歌」中野力作詞、山田耕作作曲、一九三二年四月コロムビアレコード発売、②報知新聞社委嘱「肉弾三勇士」長田幹彦作詞、中山晋平作曲、一九三二年四月ビクターレコード発売、③大阪毎日新聞

社、東京日日新聞社募集入選歌「爆弾三勇士の歌」与謝野寛作詞、陸軍戸山学校軍楽隊作曲、一九三二年五月ポリドールレコード発売。いづれも、新聞の力とレコードによってたちまち普及した。

満州事変はやがて日本による傀儡国家「満州国」の設立となり、清朝最後の皇帝宣統帝溥儀が執政に就任したが、旧東北軍の残渣や地方軍閥が匪賊となってゲリラ戦を展開し、関東軍はその対策に追われることになる。そうした折、慰問のため現地を訪れたのが藤原義江であった。ゲリラ掃討作戦に苦心する兵士の苦労を目の当たりにした藤原は関東軍参謀部から示された「どこまで続く泥濘ぞ。三日二夜を食もなく、雨ふりしぶく鉄兜」と実感と情に満ちた詩に感動し、帰国の船中で自ら作曲し、帰国後ビクターで吹き込んだ。「討匪行」として発売されたこの曲は〝兵隊ぶし〟的な素朴なメロディによって広く愛唱されるところとなった。歌の流行に便乗して藤原義江、千葉早智子主演の「叫ぶ亜細亜」という映画さえ製作されたのであった。

軍歌が流行する一方、出版法の改正によるレコード検閲が開始されたのは一九三四年八月のことであった。治安維持法によると街頭演奏しか禁止できず、出版法の〝準用〟によってレコードの発売禁止、原盤廃棄処分を可能にしたのであった。話題となったのは、一九三六年三月にビクターから出され、渡辺はま子が歌ってヒットした「忘れちゃいやョ」であった。関西から流行しはじめ次第に関東へも広がっていったが、各社が柳の下の二匹目のドジョウを狙って同様の歌が次々と出され、ネエ小唄時代といわれるようになった。「忘れちゃいやよ、教へてネ」が発禁になり、ビクターの「忘れちゃいやョ」も「接客業者がかけてはならぬ」との通達が出され、ビクターは自発的に原盤を破棄せざるを得なかった。[17] その年の二月には青年将校による国家改造を目指すクーデター二・二六事件が発生し、軍国主義的風潮が高まっていく。「好ましからざる歌謡曲」を追放する一方、明るく健康的なホームソング風の歌の普及を目指して「国民歌謡」が放送を通じて流されることになった。当時は今日のＮＨＫに当たる日本放送協会という公営のラジオ局しか存在しなかったが、東京・大阪両中央放送局が同じ

曲を六日間交代で放送し、島崎藤村の「椰子の実」（大中寅二曲）、「朝」（小田進吾曲）などの今日にも残る名曲が生まれることになった。日本放送協会が、政府の国民精神強調週間に合わせて企画したのが、万葉集の大伴家持の歌に曲をつけ「国民歌謡」として定着させることであった。「海行かば」の作曲は長く東京音楽学校（現東京芸術大学）教授を務め、帝国芸術院会員であった信時潔であった。重厚な歌詞と荘重なメロディは、やがて鎮魂歌の代表的存在となっていった。[18]

六　日中戦争と軍歌、軍事歌謡全盛時代の到来

一九三七年七月七日、北京郊外盧溝橋の日中両国軍隊の小衝突に端を発した日中戦争は、当初北支事変と呼ばれ、正式に宣戦布告した戦争ではなかったが、満州事変に続いてマスメディアはこれを〝利用〟するチャンスととらえた。

まず、大阪毎日と東京日日が真っ先に反応した。早くも七月三十一日に「わが皇軍の歩武堂々たる進軍を讃え、前線といわず、銃後といわず軍民とも唱和すべき〝皇軍の歌〟を広く江湖に募集する」と社告を出し、「進軍の歌」の歌詞を募集した。なんと二万二七四一編の応募があり、八月十二日には当選作が発表された。第一席の「進軍の歌」は陸軍軍楽隊の作曲により完成したが、第二席となってレコードのB面に収録された「勝ってくるぞと勇ましく誓って国を出たからは、手柄立てずに死なりょうか……」に始まる「露営の歌」の方が古関裕而の作曲によって大ヒットすることになった。レコードが出た当初はさして反応はなかったが、上海戦線で兵士がポータブル蓄音機を囲んで「露営の歌」を合唱している写真と記事が東京日日新聞の夕刊に大きく掲載されたのをきっかけに爆発的に売れ出し、六カ月で六十万枚を突破するレコード界始まって以来の記録を作った。出征兵士

を送る際、従来は「戦友」であったが、厭戦的な内容も含まれているため、事変勃発一カ月後から当局からの圧力によって「天に代わりて不義を討つ……」の「日本陸軍」に変えられ、「露営の歌」が出るにおよんで、見送りのみならず、南京陥落の提灯行列などの折にも好んで歌われるようになった。以後、懸賞公募は新聞社、雑誌社、陸軍省などによって次々と行われる。それは一九三八年から三九年の二年間にかけて次のようであった。「日の丸行進曲」（毎日）、「大陸行進曲」（毎日）、「愛馬行進曲」（陸軍省）、「太平洋行進曲」（毎日）、「出征兵士を送る歌」（講談社）、「空の勇士を讃へる歌」（読売）である。(19)

前線に出る兵士のみならず、やがて銃後を守るひとびとをテーマとする「軍国歌謡」が意図して作られるようになる。その代表が「軍国の母」と「軍国子守歌」であった。「軍国の母」は日活映画『国家総動員』の主題歌として八月に臨時に発売されたが、「こころ置きなく祖国の為、名誉の戦死頼むぞと、泪も見せず励まして……」と訴える美ち奴の切々とした歌唱と相まってヒットした。「軍国子守歌」は松竹映画『愛国抒情詩・軍国子守歌』の主題歌として作られ、「坊や泣かずにねんねしな、父さん強い兵隊さん、その子がなんで泣きましょう……」は、塩まさるの熱唱によって大ヒットとなり、キングレコードの社運を盛り上げた。

陸軍中央部の「不拡大・現地解決」の方針にもかかわらず、中国側の意外に手ごわい抗戦と戦線の拡大によって、事変は長期戦となった。日本国内では戦争気分が高揚し、こうした風潮のもと、国民精神総動員実施要領が発表され、内閣情報局は「愛国行進曲」を国民から募集した。約一カ月の間に五万七五七八編の詩が募集に応じて集まり、当選歌詞発表と同時に募集した作曲にも九五五五人が応募し、結局一等当選はあの名曲軍艦マーチの瀬戸口藤吉であった。当時七十歳であった瀬戸口は三年越しの病気で体調を崩していたが、「最後のご奉公」と不自由な体を推してピアノに向かったという。「愛国行進曲」はレコード八社の競作となり、同時に発売され当時としては空前の百万枚を突破し「見よ、東海の空明けて、旭日高く輝けば……」のメロディは日本国中で愛唱

された。一方、中国大陸で展開される軍事行動をテーマとした「前線歌謡」が登場する。当時多くの文士が報道班員として現地に送られ、新聞記者とは異なった目で報道に当たったが、芥川賞作家火野葦平は徐州作戦に従軍した時の日記をもとに雑誌『改造』に「麦と兵隊」を発表し、評判となった。ここに目を付けたのが陸軍報道部であった。股旅物などの優れた詩でその実力を知られていた藤田まさとに作詞を依頼「徐州、徐州と人馬は進む、徐州居よいか、住みよいか……」に大村能章の心地よいメロディが東海林太郎の熱唱と相まって大ヒットとなった。また、ひとりの兵士が故国の家族に現在の様子を知らせる手紙の形「拝啓ご無沙汰しましたが、僕もますます元気です……」で始まるユニークな口語体の詩は、新鮮で戦地でも国内でも盛んに歌われた。

戦争の拡大の一方、中国や満州を題材にした〝大陸メロディ〟が登場する。その代表が「支那の夜」であった。この歌は最初前線の兵士の間で流行し、内地へ逆輸入され、これを主題歌にして映画――長谷川一夫・李香蘭主演『支那の夜』が製作されるにいたった。映画化に当たってさらに新しく作られたのが、服部良一の名作「蘇州夜曲」であった。これをきっかけとして、「満州娘」、中国曲「何日君再来」、「上海の花売り娘」、「チャイナ・タンゴ」など〝チャイナ・メロディ〟が続々と登場する。

歌手、漫才、浪曲、落語などの芸能人は兵士の慰問への協力を要請された。朝日新聞は一九三八年一月「爆笑慰問突撃隊」（愛称・わらわし隊）の中国派遣を発表した。吉本興業所属の柳家金語楼、花菱アチャコ、玉川一郎・ミスワカナ、神田ろ山など一流の芸人が中国へと渡った。慰問の花形は歌手、それも女性歌手であった。「支那の夜」、「何日君再来」、「蘇州夜曲」などのヒット曲で人気のあった渡辺はま子に例をとると、一九三八年三月に東京日日新聞社主催皇軍慰問団に参加、中国を訪れ、三九年には台湾の台南州知事に招かれ、広東、海南島を慰問、四〇年から四一年にかけて日本国内、朝鮮、満州の兵隊、傷病兵の慰問を数多く行った[20]。東海林太郎も「皇国慰問団」の団長として戦地各地を訪れたが、嫌だったのは野戦病院で歌うことだったという。片足を

失った兵士、腕をなくした兵士、高熱でうなされている兵士の姿はとても直視できるものではなかった。片腕を失った兵士は拍手できないので頭を叩いてそれに代えた。兵隊が並んで順番を待つ慰安所の蓄音器からは日本の流行歌が流れていた。[21]

一方、日本国内でヒットせず、前線の兵士に好まれて〝逆輸入〟された曲もあった。その代表が西条八十作詞、古賀政男作曲の「誰か故郷を想わざる」であった。国内で売れないレコードを前線に送ったところ、戦闘の合間に蓄音器で流される「花摘む野辺に日は落ちて……」ではじまる歌詞とメロディは霧島昇の歌声とあいまって兵士の心を捉え、彼らの愛唱歌となっていった。

戦争の影響、軍への協力を求める動きはこどもの歌へも広がっていった。「肩を並べて兄さんときょうも学校へいけるのは兵隊さんのおかげです……」と歌う「兵隊さんよありがとう」であり、また兵士のみならず馬匹愛護の思想を普及させようと陸軍省が公募した「愛馬進軍歌」は「とった手綱に血が通う」の部分に示されるように馬と人の触れ合いを感じさせ、覚えやすいメロディも後押しして広く歌われた。

一九四〇年は神武天皇即位から数えて二千六百年に当たり、政府は国民の士気を高めるため数々の企画を立て、実行していった。この時すでに第二次大戦は始まっていた。一九三九年九月一日、英、仏はドイツに宣戦を布告、日本はヨーロッパにおけるナチスドイツの破竹の進撃に幻惑され「バスに乗り遅れるな」の合言葉のもと、日独伊三国同盟締結への道を進めていた。一九四〇年二月十一日の紀元節に合わせ「紀元二千六百年」が作られ詩・曲とも国民から募集して当選作はコロムビア、ビクターの二社から発売され、大いに歌われ、レコードは六十万枚も売れた。

この頃から、音楽は「戦争の武器」として積極的に利用されるようになる。海軍報道部長平出英夫大佐は次のように語ったという。「音楽はぜいたく品時代を過ぎ、実用品ないし必需品になった……。音楽は議論を用いず

して、また反駁する者もなく、民衆をその思う方向へ統一的に推進する。ここに着眼している……」[22]。二千六百年奉祝の大演奏会のあと、同盟国ドイツ、イタリアならよいが、枢軸国と対立するアメリカ、イギリス、オランダなどの音楽は「敵性音楽」として排斥されるにいたった。また相互監視と連携を図るため十戸前後を単位に「隣組」制度が発足し、「トン、トン、トンカラリと隣組……」の歌とともに組織化されていった。

七　〝大東亜戦争〟の時代

一九四一年十二月八日、日本海軍航空隊の真珠湾攻撃にはじまる日米開戦は、朝七時ラジオの臨時ニュースによって国民に知らされた。その日、ＪＯＡＫ（現ＮＨＫ）はすぐ作詞者と作曲者を手配、早くもその日の午後八時二十分、ニュース歌謡と称して「宣戦布告」（野村俊夫・詩、古関裕而・曲）、「太平洋の凱歌」（日本詩曲連盟・詩、伊藤昇・曲）を放送した。歌手には譜を見てすぐ歌える伊藤久男と霧島昇が起用された。真珠湾におけるアメリカ艦隊に続いて、開戦三日目、日本はイギリスの戦艦も攻撃した。十二月十日、午後四時二十分、軍艦マーチのオープニングとともに大本営海軍部発表の臨時ニュースはマレー半島沖でイギリスの誇る不沈戦艦プリンス・オブ・ウェールズとレパルスに雷撃と爆撃の波状攻撃を行い、ついに二艦を撃沈したことを伝えた。ＪＯＡＫの歌謡曲、軽音楽の担当者は、スタジオに作詞家、作曲家を待機させ、刻々と伝えられる戦勝の結果を織り込み、国民の士気を鼓舞しようと考えた。「英国東洋艦隊壊滅」（高橋掬太郎・詩、古関裕而・曲）はこうして生まれた。藤山一郎が朗朗と歌ったこの曲は即席の作品ながらヒットし、以後翌年三月末まで、マレー半島、香港、シンガポール、蘭印（現インドネシア）と、陥落したり制圧する度につぎつぎとニュース歌謡が作られラジオを通じて流されていった[23]。開戦と同時に、ラジオの番組から〝敵性音楽〟が消えた。洋楽が追放され、日本人の作曲

によるものだけが放送されたのであった。かつて洋楽を日本に導入するに当たり大きな役割を果たした堀内敬三は「米英の楽曲を完全に潰そう」と先頭に立った[24]。

開戦直後音楽を利用したのはラジオに続いて新聞社であった。東京日日新聞・大阪毎日新聞（現毎日新聞）は「大東亜決戦の歌」の歌詞を公募し、当選作に海軍軍楽隊が曲を付け、四一年の年末に発表した。緒戦の快進撃の影響にマッチした豪快なメロディは大衆の心を捉えた。以後、読売新聞、朝日新聞、大政翼賛会、大日本青少年団などによってつぎつぎと公募が行われ、また山田耕作が隊長となって音楽を戦争の勝利に協力する「音楽挺身隊」が結成された。

満州事変、日中戦争と〝大東亜戦争〟の相違は、戦争の舞台が、陸から空と海へと広がったことであった。それに伴い、空、海を題材とした軍歌が登場する。その代表が、四二年一月と二月に海軍落下傘部隊がセレベス島とスマトラを攻撃した模様を歌った「空の神兵」であった。高木東六の軍歌調でない芸術的な曲作りと、映画館に強制上映を義務付けた同名の文化映画「空の神兵」の主題歌となったこともあって広く愛唱されることになる。ベンガル湾に愛機隼と姿を消した陸軍航空隊の加藤中佐を讃える「加藤隼戦闘隊」は映画化され、軍歌の代表的存在となった。

戦争は南方へと伸びていく。それに伴って作られたのが、〝大陸メロディ〟、〝チャイナ・メロディ〟に代わる〝南方メロディ〟であった。一九四二年になってビクターが灰田勝彦と大谷冽子の吹き込みで発売した「ジャワのマンゴ売り」、軽快なリズミカルな歌を三原純子が吹き込んだ「南から南から」、そのB面で美人女優高峰三枝子が歌った「南の花嫁さん」も好んで大衆に歌われた。戦争が激しくなるにつれ男性の徴兵年齢はどんどん引き上げられ、戦場に駆り出されていった。多くのヒット曲を持つ霧島昇は徴兵によって横須賀の海軍海兵団に入隊、手ぐすねひいて待ち構えていた海軍軍楽隊によって「オイ、霧島、歌え！」とうんざりするほど軍歌を歌わされ

た。特に、古巣のコロムビア慰問団が巡回してくると霧島水兵特別出演に早変わりし、軍歌の吹き込みの仕事があると特に海軍省から外出許可をもらって東京に出てくるという状況だった。[25]

出征に伴う別れの悲しみは「名誉」という言葉に置き換えられ、それを送る家族は涙をみせることは許されなかった。小唄勝太郎の歌う「明日はお立ちか」は反戦的にならないよう配慮されたが、感傷的な小唄調のメロディは出征兵士を送りだすひとびとの心を打った。

作家の菊池寛は一九四二年七月、次のように書き記した。

> 明治時代の歌謡といえば、佐々木信綱博士に「あなうれしよろこばし」とか「煙も見えず雲もなく」などは、今でも我々の胸に、はっきりと残っている。これに比べると、支那事変、大東亜戦争にかけて、現代の詩歌人によって作られた歌謡はすこぶる多いが、後世に幾つ残るだろうか。数も多すぎ、発表機関などが多すぎて、後世にはほとんど残らないのではないか。その上、大東亜戦争開始以来は、その戦果があまりに驚倒的で、それを謳歌する歌謡などの力に及ぶところではないらしい。ことに一夜漬の作詞などは、事実に対する感激に寸毫も加える力がないのではないか。「事実は小説よりも奇なり」というが、深刻にして重大なる事実は、あらゆる歌謡など吹き飛ばしてしまうのではあるまいか。詩歌人が、個人個人の感激を託するのはよいが、この国民に大感激を後世に伝えるには足りないようである。[26]

一九四三年に入ると国内は耐乏生活を強いられ「滅私奉公」のスローガンのもとに決戦体制に入る。敵性音楽ジャズ・レコードの発売が禁止され、〝敵性語〟英語追放の動きに合わせ、レコードは「音盤」と呼ばれ、レコード会社も社名の変更に踏み切った。日本ポリドールが大東亜蓄音器、コロムビアが日蓄、日本ビクターが日本音響、キングレコードが富士音盤……など商標名を改めていった。煙草の値上げに対し、庶民は「紀元二千六百年」を替え歌にしてささやかな抵抗と憂さ晴らしをしたのだった。

金鶏あがって十五銭
栄えある光三十銭
いまこそ来たれこの値上げ
紀元は二千六百年
ああ一億の民は泣く

また、東条首相のはげ頭をからかう「愛国行進曲」の「見よ東海の空明けて……」をもじった「見よ東条のはげ頭、ハエが止まればツルッと滑る、滑って止まってまた滑る……」はこどもたちも覚えるほどひとびとの耳から耳へ、口から口へと拡がっていった。(27)

日本の戦域が南方に拡大するにつれ、多くの民間人が協力を要請された。現地人に対する宣伝・啓蒙活動とともに日本国民に日本の施策を伝える役割を担わされたのであった。評論家の大宅壮一、作家の安部知二、北原武夫、詩人の大木惇夫、漫画家の横山隆一など錚々たるメンバーが南方に派遣された。芸能人にも軍から協力の要請がきた。朝日新聞、毎日新聞の主催する慰問団に加わった歌手、落語家、漫才師、浪曲師は続々と外地にでていった。朝日、毎日に遅れをとった読売は「南方慰問団」結成の計画をたて、人気、実力とも兼ね備えた藤山一郎に白羽の矢をたてた。自分の歌で祖国のお役に立ちたい、かってオランダ、イギリスの植民地であった場所にいけばヨーロッパの文化に触れることができるかも知れないと、すぐ承諾した藤山はバンドに女性歌手、浪曲師、漫談家、奇術師など二十名で構成するメンバーの団長となって出発した。横浜港を出帆したのは一九四三年二月十一日紀元節の日であった。ボルネオ・ジャワ方面における海軍占領地域の将兵の慰問が目的であった。すでに、

その時日本軍はガダルカナルの撤退を開始、日本は敗勢に転じていた。現地で「藤山慰問団」は大いに働いた。第一部軍歌が終わると、漫談・浪花節などをはさんで、藤山一郎ヒットメロディが軍服姿で食い入るように聞き入る兵士を前につぎつぎと披露される。藤山は歌うだけでなく、時には作詞、作曲をやり、駐在中のひとびとの作った詩に曲をつけ、また地元の民謡を積極的にとりいれるなど音楽家として広い目配りを示したのであった。

一端帰国した藤山は、再び南方派遣を要請された。すでにヨーロッパではイタリアが降伏、危険を覚悟でセレベス島、ジャワ島からオーストラリアに近い最前線まで訪れ、インドネシアで敗戦を迎え、収容所での生活を余儀なくされることになる。[28]

一九四四年になると、戦局は明らかに連合軍側へと移っていった。六月、連合軍はノルマンジー上陸、米軍のサイパン島上陸に伴い日本軍守備隊三万人が玉砕、B29による日本本土初空襲がおこなわれ、さらにマリアナ沖海戦で日本海軍は空母三隻、航空機四百三十機を失う大惨敗を喫した。緒戦の華々しさは消えて、皇軍と呼ばれた日本軍は各地で〝転進〟の名を借りた敗退、玉砕さらに敵艦に体当たりする神風特別攻撃隊（特攻）まで生まれ、敗戦への波はひたひたと押し寄せてきた。十月二十日、フィリピンのレイテ島を中心に日米最後の決戦が行われ、空母四隻、戦艦三隻ほか二十六隻と航空機二百十五機を失った日本の連合艦隊は事実上壊滅状態に陥った。このフィリピン（比島）の決戦を前に読売新聞文化部の記者で音楽評論家の吉本明光の依頼で作ったのが西条八十作詩、古関裕而作曲の「比島決戦の歌」であった。

決戦かがやく　亜細亜のあけぼの
命惜しまぬ　若桜
いま咲き競う　フィリッピン

いざこいニミッツ　マッカーサー
出てくりゃ　地獄へ逆落とし

後半の二行は、問題の箇所はフィリピンのレイテ島が戦いの場所だから最初「レイテは地獄の三丁目、出て来りゃ地獄へ逆落とし」としたが、将校たちが文句をつけそこで西条は「どうぞご勝手にお直し下さい」とレコード吹き込みにも立ち会わなかった。多分吹き込みの時に「いざこいニミッツ、マッカーサー……」と直したんだろうと西条はいう。しかしたとえ他人が直したにしても、いったん西条八十作詞と発表された以上、責を負わされてもしかたない。まさか絞首刑ということはなかろうが、牢屋には入れられると覚悟したという。しかし、依頼した吉本が参謀本部の将校が勝手に変えたものだといつでも証言に立つといってくれ、軍歌を数多く作ったことに関して審査長の牧野英一博士が「西条は本来思想的にリベラリストで軍国主義者ではない」と弁護してくれたこともあり、履歴書と全著作リストを提出してから「お咎めなし」の裁定まで三カ月以上かかったという。(29)

一九四五年八月六日、広島に原爆が投下された。七日の夕方、霧島兵長以下横須賀海兵団一行は沼津への出張中広島に新型爆弾が落とされ一発で信じられないような犠牲者が出たとの情報に接した。この日を境に霧島は「もう駄目だ、どうせ死ぬんだ。いままでは〝七つボタンは桜に錨〟なんて軍歌ばかりやらされてきたが、上官が何を言おうと、これからは自分の歌を歌うぞ」と〝花も嵐も踏み越えて……〟の「旅の夜風」とか、〝花摘む野辺に日は落ちて……〟の「誰か故郷を想わざる」を部下の前で歌い出した。軍歌を歌う際の直立不動の姿勢ではなく、両手を胸の前で合わせての絶唱となった。部下として目頭を熱くしてその絶唱に聴き入った漫画家杉浦幸雄の思い出である。(30)

八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾して降伏、長く続いた戦争は終わった。

八　戦後の問題

戦争が終わって生じたのは戦争責任の問題であった。極東国際軍事裁判による戦争犯罪人の裁判と処罰、戦争責任者の公職追放などがつぎつぎ行われていったが、そうした公的な追及のほか、音楽関係者の間にもこのまま放置すべきでないとの声があがった。そのひとつが、戦時中音楽文化協会の常務理事であった音楽評論家山根銀二が山田耕作を批判し、山田が反論した山田・山根論争である。山根は終戦から四カ月後の十二月二十三日、東京新聞の「楽壇時評」で、占領軍の一青年音楽家が日本の古典音楽の伝統に触れるため山田耕作の斡旋を求め、山田がこれを機会に音楽を通じて融和交歓に乗り出したことに対し、山田は戦時中アメリカ人とアメリカ音楽の野獣性を攻撃し、憲兵、内務官僚と結託して自由主義分子を弾圧し、楽壇の軍国主義化を行ったことをあげ、〝資格なき仲介者〟として批判の矢を放ったのである。これに対し山田は翌々日「果たして誰が戦争犯罪者か――山根氏に答える」を寄稿して反論した。「……成る程私はお説通り戦時中、音楽文化協会の副会長として、時の会長徳川義親侯を補佐して戦力増強志気昂揚の面にふれて微力をいたして来ました。それは祖国の不敗を願う国民としての当然の行動として、戦時中国家の要望に従ってなしたそうした愛国的行動があなたのいうように戦争犯罪になるとしたら日本国民は挙げて戦争犯罪者として拘引されなければなりません。仮にあなたの所説が正しいものとすれば、あなたこそ私以上の戦争犯罪者であるという点に気づかれませんか。そもそも音楽文化協会は誰の手によって作られたのでしょう。それは新体制運動の奔流に乗って、あなたのヘゲモニイによって作られたものではなかったでしょうか。……山根君！　国は敗れ国民は茫然自失しています。今こそ吾々音楽家は一切の私情を去って一丸となり敗亡日本を蘇活さす高貴な運動を展開すべきです。楽壇を徒に怒罵し楽壇人を誹謗

するあなたの習癖を捨てて下さい。そして此の哀れな祖国の姿を静思して下さい……」。

この山田の反論に対し、山根は止めを刺すように、山田耕作が隊長として活躍した音楽挺身隊のこと、戦争犯罪人として占領軍に検挙された笹川良一を社長にして音楽関係の会社を創設し、そこで実力者として音楽界を支配したことなど二回にわたって糾弾した。しかし、この論争はいつのまにか消えていった。[31] 連合国による日本占領の方針が、徹底的な非軍事化、民主化から米ソ対立に代表される冷戦の発生と進捗によって修正がなされ、追放解除、旧支配層の復活が進行したことと無縁ではなかった。

一方、占領に伴い、音楽界はアメリカ文化の影響を強く受けることになった。戦時中禁止されていたジャズに代表されるポピュラー音楽が氾濫したが、もっとも大きな役割を果たしたのはラジオであった。終戦から半月もたたない九月からＮＨＫは「軽音楽の時間」を番組にとりいれ、「ジャズのお家」というディスク番組さえ登場した。歌謡曲の世界は、サトウハチロー詞、万城目正曲の「リンゴの歌」の明るいメロディが物資の欠乏、食糧難に悩む庶民の心を捉えていった。一方、敗戦によって外地に抑留され強制労働に従事させられたり、捕虜になった何百万という日本人が帰国を待ちわびていた。そのなかから「異国の丘」という傑作が生まれた。ＮＨＫの「素人のど自慢」でひとりの復員兵が歌って鐘をならしたこの曲は、作詞、作曲が誰とも知られないままシベリアの捕虜収容所で歌われ帰国した元兵隊が紹介したのだが、後に多くのムード歌謡を生みだす吉田正が現地でつくったものだった。「異国の丘」のヒットによってソ連の抑留者をテーマとする「シベリアエレジー」、「ハバロフスク小唄」などが生まれる。

日本の敗戦は、外地で終戦を迎えた歌手にもさまざまな運命をもたらすことになった。慰問団の団長として活動中の一九四五年八月十五日、インドネシアのジャワ島スラバヤで終戦の知らせに接した藤山一郎は以後捕虜として各地の収容所を転々とするが、アコーディオンだけは絶対に離さなかった。藤山のアコーディオンに合わせ

ての歌声は、収容されている日本人のみならず、インドネシアの新しい国歌「インドネシアラヤ」で看守と警備に当っているインドネシア兵まで楽しませ、収容所の雰囲気は大いに改善された。柴田司令長官は「まことに音楽は世界の言葉である」と藤山の行為を高く評価したのだった。[32] 北京で終戦を知った渡辺はま子は故国への帰国を待つ日本人のため大いに歌い、天津の収容所、さらに塘沽まで出かけ中国兵、アメリカ兵を含むひとびとを「支那の夜」改め「春的夢」で慰めた。天津収容所の管理権がアメリカ軍から中国軍に移されると「敗戦国の国民が収容所のなかで劇場を設けて歌舞音曲をやっているとはけしからん」とやり玉にあげ、閉鎖を迫ってきた。命令撤回の交渉役に選ばれたのは渡辺はま子だった。歌を所望する中国側に「私の歌を聴きたければ、閉鎖を撤回して欲しい」と要望、伴奏なしで「何日君再来」、「夜来香」を中国語で歌う代償に閉鎖中止を約束させたのだった。[33]

戦争は、戦死で夫を失くした未亡人、空襲で家族を失った戦争孤児を多く生みだした。生きる手段として身を売らなければならぬ〝パンパンガール〟となったり、孤児院での生活を余儀なくされる子供も少なくなかった。新聞の投書欄に載った二十二歳になる引揚女性の飢餓ゆえの転落の道筋に怒りに震えて詩を書き、曲を付けた「星の流れに」は「星の流れに身を占って、どこをねぐらの今日の宿……こんな女に誰がした」は、一九四七年十二月の発売と同時に闇市に群がるひとびとの心を捉え大ヒットとなった。[34] 戦争孤児が住む家をテーマとした連続放送劇「鐘の鳴る丘」のテーマソング（菊田一夫作詞、古関祐而作曲）は占領軍の意向もあって前後三年六百回のロングランとなり、毎日ラジオから流される「緑の丘の赤い屋根、とんがり帽子の時計台……」は日常的に口ずさむメロディとなった。

渡辺はま子、淡谷のり子、榎本美佐江など歌手は浪曲、落語、腹話術などの芸能人とともにかつての戦地に代えて、巣鴨など各地の拘置所に勾留されているA級戦犯、BC級戦犯の慰問に赴いた。それは処刑を待つ間、刑

期を終えるまでの期間のなによりの慰めとなって、元陸軍大臣など戦時中権力の中枢にあったが、いまは一囚人となったひとびとから礼状が届いた。

一九五二年四月、講和条約の発効によって日本は独立を回復したが、それで戦後処理がすべて終わったわけではなかった。渡辺はま子は巣鴨プリズンの慰問を通じてフィリピンのマニラ郊外にあるモンテンルパ刑務所に多くの日本人が収容されており、なかには全く無実なのに死刑施行を待つばかりのひとすらいることを知った。そして同刑務所で作詞、作曲がなされ皆が歌っている「ああモンテンルパの夜は更けて」の楽譜を入手し、会社と交渉しレコードにしたばかりか、まだ国交さえなかったフィリピンへ渡り、その年のクリスマスの夜、刑務所でコンサートを開いたのだった。「モンテンルパ」の大合唱をおこなう囚人の服の色は死刑がきまっている水色、そうでないレンガ色とはっきり分かれていた。帰国してもあの強烈な印象が頭を離れなかった渡辺はま子は、この歌のメロディを仕込んだオルゴール付きの美しいアルバムを現地に送った。加賀尾教誨師は釈放請願の時このアルバムをキリノ大統領への土産に持参した。曲の由来の説明を聞いた大統領は囚人の釈放を約束、七月には死刑予定の囚人を含む百八人が帰国できることになったのである。まさに歌と渡辺はま子の執念が多数の命を救ったのである。[35]

ジャズや歌謡曲の流行とともに、もうひとつの音楽の流れが生まれていった。平和、反戦と結び付いた「うたごえ運動」である。ロシア民謡、労働歌などとともに「原爆許すまじ」（浅田石二詩・木下航二曲）、あるいは徴兵で満州へ送られた兄を想う「もずが枯木で」（サトウハチロー詩・徳富繁曲）の掘り起こしなど「うたごえ運動」がきっかけとなって世に出た曲も多かった。

結び

戦争と音楽の関係は一過性のものではない。時には思わぬところにその痕跡を残す。

一九八一年十月、海上自衛隊練習艦隊はメナム川を遡航してタイの首都バンコクに入港した。一行はタイ国海軍軍楽隊の演奏する「軍艦マーチ」で迎えられたが、交歓演奏をしているうちに戦前の日本の行進曲が何曲か含まれていることに気がついた。楽譜を見せてもらうと行進曲「海の進軍」は戦前の日本の楽譜をそのまま用いていた。さらにタイの海軍軍楽隊には日本の吹奏楽曲として、行進曲十七、円舞曲四、序曲二、その他一の合計二十四曲が貴重なレパートリーとして保存されていた。楽譜の入手経路については定かではないが、一九四三年八月「南方向吹奏楽譜」が決定し、八十一曲が選ばれて送られたことからそれが残されていたと推測された。

タイと並んで台湾でも、中華民国海軍軍楽隊に「横須賀海兵団軍楽隊」と押印された「アメリカンパトロール」の楽譜があり、調査の結果、アメリカで出版され、横須賀海兵団から第三艦隊軍楽隊に移管、支那方面軍艦隊軍楽隊と名称が変わり、戦後国民党の海軍に接収されて上海で使用されていたものが、国共内戦に敗れた国民党政権の台湾移駐に伴って運ばれたと推定された。[36]

また、日本の戦争にまつわる音楽は思わぬひとに影響を与えている。

十六歳の少年毛沢東は、学校で日本から帰った教師から「黄海の海戦」という歌を教えてもらったエピソードを、アメリカ人ジャーナリストエドガー・スノーに延安の洞窟のローソクの灯の下で語っている。

わたしはまだその魅力ある歌詞をおぼえています。

雀は歌い　鶯は踊っている

春の緑の野は美しい
ざくろの花はまっかだ
柳の葉は青く
真新しい絵のようだ

そのころわたしは日本の美を知り、感じ、ロシアに対する日本の勝利のこの歌のなかに日本の誇りと力の何物かを感じました。野蛮な日本――わたしたちがこんにち知っている日本――もあったことは思いもよりませんでした。

一八九三年生まれの毛沢東が十六歳といえば、明らかに日露戦争直後であるが、「黄海の海戦」は日清戦争時であり、当時作られた「黄海海戦の歌」には、「雀は歌い……」などといった文言はまったく見当たらず、毛沢東の思い違いかと思われるが、とにかく毛が日本の歌と日露戦争の勝利を結び付けて大変な刺激を受けたことは見てとれる。(37)

日本においてもかつての軍歌、軍国歌謡を扱った著書、CD全集が出され、(38) なつメロ愛好家の間に「軍歌を歌い継ぐ会」が生まれ、活動している。会の目的は「軍歌・戦時歌謡（以下軍歌という）を歌いかつ聴いて楽しむこと。軍歌を通じて会員相互の親睦及び関係知識・情報の交換を図ること。軍歌を継承・普及し、次世代へ引き継ぐこと」であるという。(39) 他方、「戦時下の日本音楽について、容赦ない見直しを提唱したい」との立場から、翼賛運動に邁進した作詞家、作曲家をとりあげその責任を追及する研究者もいる。(40)

戦争は音楽の世界にも明暗両面を今日まで残しているのである。

（日本音楽著作権協会（出）許諾第一一〇五三八六-一〇一号）

（1）日本の戦争と音楽の関係をとりあげた著書に、矢沢寛『戦争と流行歌――君死にたもうことなかれ』（一九九五年、社会思想社）、堀雅昭『戦争歌が映す近代』（二〇〇二年、葦書房）、戸ノ下達也『総力戦と音楽文化――音と声の戦争』（二〇〇八年、青弓社）などがある。

（2）堀内敬三『音楽五十年』（一九四二年、鱒書房）五ページ。

（3）同右書二〇ページ。

（4）日本の音楽教育に果たした伊澤修二については、奥中康人『国家と音楽――伊澤修二がめざした日本近代』（二〇〇八年、春秋社）。

（5）国民を巻き込んでの戦争としての日清戦争を分析した著書に佐谷眞木人『日清戦争――「国民」の誕生』（二〇〇九年、講談社）。

（6）小川寛大『「海行かば」を歌ったことがありますか』（二〇〇六年、エイチアンドアイ）九九～一〇〇ページ。

（7）矢沢前掲書一七ページ。

（8）田山花袋『東京三十年』（岩波文庫）（一九八一年、岩波書店）五八ページ。

（9）佐谷前掲書一五六～一五七ページ。

（10）矢沢前掲書二二～二三ページ。

（11）同右書二四ページ。

（12）同右書二六ページ。

（13）同右書四一ページ。

（14）谷村政次郎「戦時と平時の軍楽隊」（『軍事史学』四四巻二号、二〇〇八年）所収。

（15）満州事変と日本のマスメディアについては、池井優「一九三〇年代のマスメディア――満州事変への対応を中心として」（三輪公忠編『再考・太平洋戦争前夜――日本の一九三〇年代論として』（一九八一年、創世記）。

（16）爆弾三勇士については、加藤秀俊「美談の原型――爆弾三勇士」（朝日ジャーナル編『昭和史の瞬間・上』一九

六六年、朝日新聞社）所収。

(17) 森本敏克『音盤歌謡史――歌と映画とレコードと』（一九七五年、自由書院）一〇〇～一〇一ページ。

(18) 海行かばについては、新保祐司『「海行かば」の昭和』（二〇〇六年、イプシロン出版企画）。学徒出陣壮行の早慶戦の最後は期せずして両校学生による「海行かば」の大合唱となった。

(19) 公募歌の興隆とその背景については、櫻本富雄『歌と戦争――みんなが軍歌をうたっていた』（二〇〇五年、アテネ書房）の第一部軍歌の本流・公募歌。

(20) 芸能人の中国派遣については、早坂隆『戦時演芸慰問団「わらわし隊」の記録――芸人たちが見た日中戦争』（二〇〇八年、中央公論社）。

(21) 菊池清麿『国境の町――東海林太郎とその時代』（二〇〇六年、北方新社）一五四ページ。

(22) 古茂田信男、島田芳文、矢沢保、横沢千秋『日本流行歌史』（一九七〇年、社会思想社）一〇二ページ。

(23) 池井優『藤山一郎とその時代』（一九九七年、新潮社）一〇六～一〇八ページ。

(24) 櫻本前掲書一四四～一七一ページ。

(25) 依田信夫編『海軍軍歌集』（一九七六年、野ばら社）に寄せた霧島の序文。

(26) 菊池寛「話の屑籠」（『文藝春秋』一九四二年四月号）。

(27) 加藤秀俊、加太こうじ、岩崎爾郎、後藤総一郎『明治大正昭和世相史』（一九七五年、社会思想社）二七〇ページ。

(28) 戦時中の藤山一郎の活動については、藤山一郎『藤山一郎自伝――歌声よひびけ南の空に』（一九九三年、光人社）と池井前掲書。

(29) 吉川潮『流行歌（はやりうた）――西條八十物語』（二〇〇四年、新潮社）一九八～一九九ページ。

(30) 杉浦幸雄「この道――霧島昇氏の絶唱」（夕刊フジ一九九九年八月三十一日）。

(31) 山田・山根の戦争責任論争については、櫻本前掲書二一六～二二八ページ。

(32) 池井前掲書一三六ページ。

(33) 中田整一『モンテンルパの夜はふけて――気骨の女・渡辺はま子の生涯』（二〇〇四年、ＮＨＫ出版）一一九ペー

ジ。

(34) 「こんな女に誰がした」という歌詞には「こんな日本に誰がした」、「こんな暮らしに誰がした」という日本人全体の恨みが色濃くこもっていたのだと思うと作家の五木寛之はＮＨＫラジオ深夜便で語っている。五木寛之『わが人生の歌がたり――昭和の哀歓』（二〇〇七年、角川書店）一六七ページ。

(35) モンテンルパ収容所のＢＣ級戦犯のストーリーは、中田右書と新井恵美子『モンテンルパの夜明け』（二〇〇八年、光人社）。

(36) 前掲谷村論文。

(37) エドガー・スノー、宇佐美誠次郎訳『新版中国の赤い星』（一九七二年、筑摩書房）九九～一〇〇ページ、なお「黄海海戦の歌」歌詞全文は、堀内敬三『日本の軍歌』（一九四四年、日本音楽雑誌社）八七～八九ページ。

(38) その例として、長田暁二編『日本軍歌全集』（一九七六年、音楽之友社）、日本コロムビア編『軍歌・戦時歌謡大全集――海ゆかば』（二〇〇八年、日本コロムビア）。

(39) 野口健「軍歌を歌い継ぐ会と私」（『なつメロ』二一三号、二〇一〇年八月）。

(40) 櫻本前掲書。

〔付記〕本稿は二〇〇九年七月二十五日、名古屋において行われた軍事史学会関西分科会での報告を論文にまとめたものである。当日、コメントを寄せられた出席者に感謝したい。また、霧島昇について資料を提供してくださった霧島昇氏三女二代目松原操さんに謝意を表したい。